

津村俊充名誉教授退職記念号

南山大学長 ミカエル・カルマノ

2015年3月に本学を退職された津村俊充名誉教授に献上するこの『アカデミア』記念号の目的は、先生の研究業績そして在籍中の本学への貢献に対する感謝の意を表することなので、まず注目されるのは先生が文章という形で残した研究成果であろう。しかし一同じ学科に属している人間として一小生がここで注目したいのは先生が活字の形で発信された研究成果よりも、キャンパス等で会う度に目と耳に入る人物そのものの活動ぶりである。

例えば先生の声。授業中の声を聞いた経験はないが、それ以外の場所で聞いた先生の声の中でも特に耳に残っている声が二つある。その一つは心理人間学科の卒業パーティーで先生が必ず披露してくれるご自身のギター伴奏で歌う自作の歌である。津村先生の授業を受けた学生であっても一番耳に残っているのは多分この歌でないかと私は思う。お祝いを兼ねる饞（はなむけ）の歌で、メロディーに乗った最終講義という印象も受けた。

もう一つ耳に残っているのはキャンパスで先生に出会う度に小生が投げかけた（正直言ってちょっと捻くれた）挨拶に代わる質問—「楽しいですか」—に対する先生の変わらぬ応えである—「楽しいよ」。いうまでもなく、この「楽しいよ」の調子はその日の状況によって多少違う調子で響いてきたが、いつでも、きっとあまり楽しくない時も、前向きな姿勢を崩さない津村先生であった。

先生のこの前向きな姿勢が一番力を発揮されたのは2000年の学部改組のときだった気がする。大学の根本的な改革の一環として当時の南山短期大学の人間関係科と大学の文学部教育学科との合併から今の心理人間学科が生まれたが、津村先生が最初の学科長を勤められたことはこの改組の成功に貢献したに違いない。その上、短期大学に勤められた時から深く関わって来られ、同じ時期に大学に移った人間関係研究センターにおいても先生は中心的な役割を果たし続けたのである。そして、2004年に設置された人間文化研究科教育ファシリテーション専攻修士課程の設置の際も、先生の専門であるラボラトリー方式の体験学習は大きく貢献した。

業績一覧を見れば、多分先生の教育研究活動を集約する一つのキーワードが目につくであろう—「プロセス」。小生の専門分野である教育課程論を引き合いにするのは恐縮ではあるが、そこでだいたい前から主流となっている教育のパラダイムは目標設定を出発点として、最後の評価でその目標の確実な達成を確かめることを目指す。つまり、定められた目標に対して、プロセスは、どちらかという、その目標を確実に達成するための方法、あるいは目標達成に必要な道具に過ぎない。このような（小生に

とって短絡的な発想として物足りないと感じる)パラダイムに対して津村先生の「プロセス」は極めて重要な注意を呼び起こしている一人間性を大事にするプロセスこそ本当の教育の中核と目標である、と。教育において結果(知識, スキル)を得ることは大事であるが、その過程において(津村先生の言葉を借りれば)「プロセスに生きる」ことこそ大学教育の目的である。